

仏の心を心として

我等の目標

- その一……………
- その二……………
- その三……………
- その四……………
- その五……………

我等の目標 その四

「私どもは、仏の心を心として、全ての人をこの道にお誘いして歓びをお分かち致しましょう。」

大乘と小乗

仏教では、迷いの世界を、地獄、餓鬼、畜生などと説く反対に、悟りの世界を、声聞、縁覚、菩薩、仏と説きます。その中で、菩薩や仏の世界を大乘と言ひ、声聞、縁覚の世界を小乗と言ひます。

小乗とは小さい乗り物ということで、自分一人しか乗れない乗り物です。それに反して大乘とは、一切万人の乗れる大きな乗り物ということです。春が来ると、草も木も、一切のものが、春の力に乗っています。春は大きな乗り物です。そこで大乘仏教では、一切万人、誰でも乗らなければ人間とは言えない大きな道を説くのであります。譬えて言えば、仏教に「無我」ということを説きます。私どもの生き方が、自分一人の勝手や、幸福を通すための打算的な心、それから出る行い、生活だけでありますと人生は美しくなるものではありません。

この我を通そうとするあさましい生活が、やがて救われて、無私の生活、自分を全て捧げきった生活、人類社会のためなら、自分の幸を求める心を超えて、人類共同の仕事の中に自分の全てを打ち込んで働く、こうした無私の生活者が集まらないと、人生は行きづまってしまいます。ですから、無私の生活ということは、人類の全てが承認しなければなりません。それでは無我に生きるにはどうするか、そこに大変な問題が横たわっています。今はあづかっておきます。

人間の死

さて、小乗の組にはいる人ですが、声聞というのは、自分一人だけ助かろうとしている人です。この考えにいますと、何時までたつても安心がありませんから、お話しならお話を一生聞いているしか道がない。声聞とは「声を聞く」とありますが、言葉は受け取れても、その真意がわからないのです。話が話でおわって、一生お寺参りをしたが無にもない。結局は言葉だけ覚えていて、よく世間で、自分一人の幸福ばかり考えている人のことを声聞根性と言ひますが、我が打ちくだかれない以上、救われま

せん。次に、縁覚というのは、あるいは独覚とも言いますが、これは声聞とは反対で自分ではわかったつもりです。固い堅いものを持っています。この独覚になると、自分より賢いものはないと思っっています。自分のすることは何でも正しい。もう自分は悟を開いた。外から見ればふき出したいほどおかしくても、自分では得意です。もうこうなると木が太るのを止めたのと同じです。即ち枯れた時です。新しいことを知れば、知っただけが高慢の材料になります。

声聞も縁覚も嫌な世界であります。

ですが、この二つの世界において根本的に違う所は何処かと云いますと、真理に対する態度において、声聞は聞くことばかり知って伝えることを知りません。自分が助かることに急で他を省みない。

縁覚は、それに反して、伝えることを知って聞くことを知りません。人に聞かす一方です。世には、人を捕らえらるとすぐ説教ばかりして、自分は決して聞かない人があります。都合のいいように人には語って、自分は遂に、天地間、誰の前にも頭を下げない。困った存在です。

そこで、龍樹菩薩は「もし、菩薩が二乗に墮すれば菩薩の死である」と言っています。その心は、人間がもし声聞や縁覚に墮ちたならば死んだと同じである、真理の人間にはなれない、ということでもあります。

菩薩の道

それに反して、真実に生きた人間——即ち菩薩は、自分が、自分全体を捧げ、全人類に生きていますから、その生き方の中に法悦をもっています。どんな苦悩や、禍や、不幸の中にも声なき声を聞いています。したがってその生き方が終始一貫していませんから強いのです。

真理を求めます。そのために自分の生き甲斐があることを知っています。しかし、真理は妙なもので一知れば十の深さ、十知れば百の彼岸が見えて、だんだんと、自分の愚かさを知ります。ですから、求めること聞くことを廃業しません。卒業がないです。

しかしそれかと言って、声聞のように、ふらふらした腰で、不安心な世界にもいません。金剛の腹力を持つていますし、自分の中に満ち足りていることを自覚していますから、外物を追うて、自分の不満足を補おうとはしません。感謝のために神仏は拜んでも、得手勝手な祈祷など致しません。

永遠に聞くのみならず、伝えずはおれない強い強い願いを持っています。伝えずにはいられない所が声聞と違いますし、聞かずにはいられない所が縁覚と違います。

去年の暮れに、兵庫県住吉支部の、大島みち、大島はやの二人が台湾の基隆にゆきました。みち法姉がお母さんで、はや子さんはお嫁さんです。みち法姉は、住吉支部の産みの親です。——こんなことを書くのと叱られますが——まあ立派な人です。あの年でいて、どんなむずかしい話でもわかる。合掌して聞いてゆかれる相、私のみならず、誰でもがあのお母さんには参ります。御自身では「何という私の強い人間でござ

いましょう」と言われますが、私どもが見れば微塵も我の相が見えません。仏様は我の強い恐ろしい心を見出した人を、無我にするのかも知れません。猷身的な、人を裁かない、春のような温さ、観音様の御化身ではないかと思われるほどです。長年聞いていわゆる天晴れお同行になると高慢な相になるものですが、それがちつとも見えません。永遠に求道の相です。それなら求めてだけいるかと言えば、阪神間住吉地方の灯明台でした。住吉支部を造るのにも、一人東奔西走です。誰をでも動かさずにはおかない熱が見えます。今度、御令息が台湾と朝鮮羅津間の航路に転任になつて、台湾にゆかれましたが、十二月の大会のお別れの時、「先生やりますよ。台湾でも、夏の聖講には必ず帰つて来ます。先生にも必ず台湾へ来て頂くようにします。」あの声が耳の底に残っています。大島さんが台湾へ一歩足を入れたことは、光明団が足を一歩入れたことです。全身これ仏、全霊これ如来、純正光明団団員。

これのない人

「私どもは、仏の心を心として、全ての人を、この道にお誘いして歓びをお分ち致しますよう。」

求めずにはいられない何等の願ひもない人には、人生の意味は知られない。

求めずにはいられない何等の願ひもない人には、人類向上発展、人生浄化、文化創造の尊い重い使命は渡されない。

この使命が自覚されない限り、本質的な生き甲斐と喜びはこの人にはない。

したがって――

この人には、伝えずにはいられない願ひはない。誘わずにはいられない道はない。分たずにはいられない悦びはない。

たつた一つのもの、たつた一つのもの。

そのもの汝にありや。

敢えて問う、汝は人生の如何なる役割を果たしつつありや。